

武猛 表紙イラスト:
日之下あかめ

二次元ぷち文庫

試し読み版



噴乳!

ミルクシスターズ

MILK SISTERS

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『噴乳！ミルクシスターズ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



噴乳!

ミルクシスターズ

MILK SISTERS

武猛

表紙 / 日之下あかめ

登場人物紹介

Characters

うき たゆうと

宇喜田裕人

巨乳&母乳マニアの少年。インターネットで怪しい薬を購入し、隣の三姉妹に対して実験することに。

はまや

濱谷あゆ

三姉妹の長女。裕人の四歳上。濱谷家の家事を行っている。

はまや まゆ

濱谷真夕

三姉妹の次女で裕人の一歳上。スポーツが得意。

はまや みゆ

濱谷美夕

三姉妹の三女で裕人と同級。裕人に対して怒りっぽい態度を見せるが？

夏の熱気も薄れ、涼しくなってきた秋の朝。

宇喜田裕人はベッドから起き、校章のついた白のシャツと黒のスラックスに着替え、勉強道具が入ったカバンを持ち、二階の自室からでて階段を下りていく。だが一階は誰もおらず、静まりかえっていた。彼はすぐに家をでて、その隣の濱谷家へ上がりこんでダイニングへいく。

「あら。おはよう、裕ちゃん。もう朝食、できてるわよ」

彼女は全体的にふんわりとした、透明感のある薄いベージュの上着と同色のロングスカートを身に着けている。髪は黒いストレートで腰まで長く、ピンクのエプロンを着けた背の高い女性が、キッチンからにこやかに声をかけてきた。

「おはよう、あゆ姉」

素直に彼は、挨拶を交わす。

すぐそばの洋式の食卓には、黒髪をちようど肩のラインで揃え、白のブラウスに青いネクタイを締め、青のチェックの短いフレアスカートを着けた女の子が、既に朝食を摂っていた。

「おはよう、美夕」

裕人は彼女に挨拶しながら、向かいの席に座る。その彼女は挨拶を返すかわりに、むすつとして眉を上げて口を開いた。

「ちよつと遅いわよ、裕人。早くしないと遅刻しちゃうじゃない。一体昨日の夜、何をしていたの？」

彼はごめんと謝りながら、急いでごはんを口に運んだ。

裕人自身は基本的に素直な性格で、おとなしめではある。容姿も決してイケメンというわけではなく、どちらかといえば全く素朴な顔で、人畜無害な感じである。だが最近、反抗期なのだろうか。向かいの彼女に服の身だしなみを直されたりすると、自分でできるからと彼女の手を払い、自ら直すことが多い。

そんな裕人だが、実は巨乳フェチだ。近頃はインターネット通販を利用して、巨乳AVを集めているほど。

向かいで怒っているのは、同じ学園で同クラスの濱谷家の三女、濱谷美夕。

顔の輪郭はほっそりとしてて、目はつり上がっている。全身はスレンダーなのだが、それとは反して、ブラウスの上からでもわかる、こんもりと膨らんだ乳房。それは上半身を少し前に傾けただけで下の房がテーブルに接触し、おそろくたわんでしまう。

当の本人は胸のことになると気になるらしく、裕人が視線を向ければ、じろじろ見ないでと怒られてしまうくらいだ。お隣さんの同級生ということもあるので、なるべく胸を見ず、異性を意識せずに応対しているつもりだ。

キッチンのほうで調理しているのが、濱谷家の長女のあゆ。彼女は美夕よりも頭半分背

7

を追い越しており、衣服で隠すようにしているが、全体的にふっくらめで、目も三女とは真逆で垂れ下がっている。ふんわりとした衣装でわかりにくいのが、その突きでた胸の状態から推測すると、三女と同じかそれ以上の膨らみだ。なにかしら動く都度、振り子のようによさゆきと揺れを見せる。サイズ的にも小玉スイカをはるかに上回り、相当の重量がありそうだ。性格は見た目通りに温厚。怒ったところを見たことがない。ただマイペース過ぎで、なおかつ天然ボケな点が玉に瑕だ。

長女のあゆは、三女の美夕より四歳上で、一切の家事を行っている。濱谷家の両親は海外勤務しており、次女、三女が家事などあまり得意でなかった。そのため、長女は学園を卒業したあと、花嫁修業と称して毎日家の雑務をこなしている。

そんななか、裕人は何故隣の家で食事を摂っているのか。

元々彼は三人家族だったが、幼少のころに母を病気で亡くしてしまった。そしてとり残された裕人と父の二人は、家事などできなかつた。そして現在、彼の父が出張で遠くに離れてしまっていることから、兼ねてから仲のよかつた濱谷家に、食事に関しては未だに甘えている状態である。

自宅にも、今は裕人一人しかない。

「それにしても真夕ちゃん、遅いわねえ。寝坊かしら？」

裕人が食べ終わりそうなころ、調理の済んだ長女は、眉をひそめて心配そうに、階段の

ほうを見る。

そのとき、ちょうど階段のほうから、トントンと階段の板を叩く音が聞こえてきた。「おはよう」とあくびをしながら、髪がショートで茶髪の女の子が階段を下りてくる。しかし、裕人は彼女の姿に、ドキッとした。

「まっ、真夕姉っ。なんて格好をしているのよっ！」

三女の美夕は立ち上がって目を見開き、大声を上げて怒鳴る。真夕と呼ばれた女の子は、薄く透けたピンクのベビードールを身に纏まとっていたが、その下にはパンティしか着けておらず、ブラジャーもつけていなかった。そのため彼女が歩く度に、たわわで丸々とした乳房が、ゆさゆさと上下に揺れ動く。

「うるさいなあ。昨日はなんでか眠れなかったんだよっ」

彼女は気だるそうにしながら答えた。

濱谷家の次女、真夕は三女より歳が一つ上で、身長は姉と妹の間。運動が苦手な妹とは違って彼女はそれが得意であり、陸上部に所属している。この通り活発であっけらかんとしているのだが、大雑把でもある。

部活をやっているためふとももが太く、全体的に筋肉質。それでいて姉や妹ほどではないものの、大きな果実のような二つの乳房がぶるんぶるんとたゆむ。

普段の朝の真夕なら、制服を着てから食卓にくるのだが、どうやら寝坊したようだ。ぎ

やあぎやあと美夕が注意してきても、次女は全く意にも介さずに、裕人の隣に座る。

「別にいいじゃない。胸を見せたって減るもんじゃないし。ねえ、裕人」

次女に同意を求められたが、彼はまともに次女を見られず、自分の顔ももう真っ赤。そして、時折ちらちらと横目で、次女の美しき曲線を描いた房をわずかな間隔で何度も見つめつつも、うんと頷く。

巨乳好きの裕人にとつて、これほどのいい景観はないだろう。ついでにいえば、濱谷家にお邪魔すること自体が、パラダイスなのだ。

(もしかして昨日のアレが、原因なのだろうか?)

そんなことをうわの空で考えていると、長女が彼に近寄ってくる。

「あらあら、裕ちゃん顔を赤くしてどうしたの。熱でもあるのかしら?」

食卓でのやりとりを聞いていなかったのか。長女は座っている彼のそばまで寄って、おでこ同士を合わせてきた。彼女が熱を感じ取ろうと、そのまま動かない間、裕人が何気なく視線を下に向けると。長女の着る衣服の大きく開く襟の部分から、二つの大きな房の間の谷あい、彼の視界に飛びこんできた。

(うわっ、これがあゆ姉のおっぱい……大きすぎるっ)

ドキンッと心臓が破裂しそうなほど、大きく脈を打つ。興奮が増してさらに熱が上がりそうで、下半身のほうもムズムズと熱を持ち始めた。だがこれほどの絶景はずっと見てい

ても飽きることがない。

その美しき溪谷を呆然と眺めていると、急に腕を引つ張られ、強引に立たされてしまう。「もうっ、ぐずぐずしてたら、遅刻しちゃうんだからっ。真夕姉も早くっ！」

三女の美夕は怒りを露わにして、裕人とともに家から出ていく。彼はカバンで股間の盛り上がり隠しつつ、彼女のあとをついていく。

「だいたい、学生は勉強が専門なんだから、余計なことに現を抜かすべきじゃないわ」

美夕は唇を尖らせ、足早に彼の隣で論すように話す。しかし、当の本人は頷くものものの空で、興奮が収まることになかった。

説教されてから約五分後。二人の後方から、「待つて〜」という声が聞こえてくる。振り向くと、次女が基準より短いスカートをはためかせ、見え隠れするパンティも気にせず駆けてきた。するとまたもや三女が、次女へはしたないと叱りつける。その声をよそに、裕人は一週間前から昨日までの出来事を思い起こしていた。

一週間前の夜、彼はインターネットの怪しいサイトで、ある薬を見つける。そこには「母乳が出る薬」と表記されていたが、彼女もいない裕人には全く無縁のもの。しかし、巨乳、母乳マニアにとっては、夢のまた夢。使う相手がいないのにも関わらず、妄想を膨らませ、気がつけば購入ボタンをクリックしていた。

翌日。早速それが届くが、いざ実物がきてみると、どうしたものと考えこむ。自分で飲んでも、当然どうしようもない。もし使うなら思い当たるのは、隣に住む三姉妹くらいだろう。だが、彼女達にどうやって薬を飲ませるのか。

それ以前に、何よりも罪悪感が働く。ずっとお世話になってきた姉妹なのに。そんなことを二、三日、悶々としながら迷っていた。

しかし、「巨乳」「母乳」というキーワードに踊らされた裕人は、ついに大きく膨らんだ欲望に負けてしまった。

休日になった次の日。彼は濱谷家へ遊びにいき、怪しいサイトとは別のインターネット通販で、おいしい紅茶が入ったと、自ら彼女達へ振る舞った。

三姉妹は揃って紅茶に目がなく、毎日欠かさないほど好きなのだ。何も知らない彼女達にごめんさいと心で謝りながらも、既に薬を混入させた紅茶を淹れ、各々に渡す。

そして、三人が疑うことなく、こくこくと喉を動かしながら飲んでいく様子を、裕人は心臓をどくんどくと高鳴らせながら、じっと見つめていた。

「本当にこれ、おいしいっ」

飲み干した途端、三女の美夕の顔が口角を上げて明るくなり、姉二人もおいしいと鼓舌を打ち、おかわりをしてきた。美夕に至っては、母乳薬入りの紅茶を四杯、五杯と、小さな幸福感を感じながら飲んでいた。

まさか、今まで見ていただけの彼女にフェラされることに感激する反面、本能のまま求めていくこと自体もしかすると、あの薬に媚薬も混合していたのかもしれない。ふとそんなことを考えこむ。

裕人の亀頭を、舌でゆっくり舐めまわしたあと、続けて肉竿も飲みこんでいく真夕。頭を前後に振り、離れそうになる度に、竿が透明な唾液に染まっていく。

どこで覚えたのか、彼女はAV女優のように、時折上目遣いで見上げ、舌で丁寧に亀頭から竿にかけて、ジュブジュブと水音をたてながら、しゃぶり続ける。肉棒奉仕のうまさ、大きな声で唸ってしまえそう。

汁で濡れきった肉棒が口から離れると、今度は二つの乳房を持ち上げて、その狭間に収めていく。

「裕人は、こっちのほうが嬉しいよねえ」

「はっ、はうううっ！ まっ、真夕姉のおっぱい、柔らかいし、すっごく熱いよおっ」
あまりにも心地がよくて、肉棒がビクビクッと震えてしまう。彼女は笑顔でこちらを見上げながら、肉棒を乳房で包んでいき、唾液を亀頭へ垂らして、滑りをよくさせる。

「私も裕人のオチンチンの体温を感じて、どんだんおっぱいが熱くなってきちゃうっ」
次女が両手で圧力を加える度に、肉竿が扱かれて、乳房の割れ目から真っ赤になっている、牡の先端が顔をだす。

夢中でパイズリし続ける真夕は、加圧すればするほど乳房の内側が熱を帯び、ジンジンとしてきた。初めての感覚であったが、戸惑うことなく圧迫していく。

顔をだしている亀頭の尿道口を、ペロペロと舐めているうちに、乳首がムズムズし始める。しかし、痒いというよりは、痛いような気持ちいいような、そんな感覚。

次第に乳肉擦りのスピードが増すと、乳頭が膨れ上がり、その先端から何かがこみ上げてきた。

「あううっ、おっぱいくるうっ、何かくるううっ！」

真夕が眉を寄せて叫んだ瞬間。乳頭から、ビュビュウツと白い飛沫を飛ばした。

「はあううっ、なにかでてるっ、おっぱいからでてるうううっ！」

乳首から勢いよく噴きでたのは、母乳だった。霧状というよりは、滴が彼の股間部を濡らす。またもや彼女はアクメを感じたらしく、舌をだして身体を細かく震わせていた。

（ほっ……本当に母乳がでたっ。あの薬の効果は、本物だったんだっ）

上からじつくり観察していた裕人は、驚きと感動に震えていた。それによって彼の興奮度が増し、息遣いが荒くなつてゆく。

「あっ、ああっ……おっぱい、気持ちいい……」

彼女は薄眼でうっとりとして、噴乳の快楽に浸っていたが、母乳がでたこと自体、疑問にも思わなかった。どうやら噴乳したことによって、たが籐が外れてしまい、すぐに肉竿を手

で扱きだしてくる。

「もうアソコが熱くて、我慢できないの。裕人の立派なオチンチン、ちようだあいつ」
興奮しきっていた真夕は、立ったあと、紺色ブルマーの布地の上から、逆三角形の頂点付近を数回擦りあげる。そして、彼の目の前に、人差し指と親指を、見せつけてきた。指との間に、透明で粘っこい液体が、ねちねちと糸を引く。

「ほらあ、私こんなになつてるんだから。裕人のこれ、早く挿れてえっ」
乱れた吐息を吐きながら、肉棒をねだる真夕。

ブルマーを見てみると、擦った部分がさらに濃い紺色に染まっていた。そこへ真夕が積極的に肉竿を握り、自ら腰を寄せ、牡の先端を牝肉へ押しつける。

裕人は彼女のされるがままに任せていると、亀頭の先つぽから媚肉の熱が伝わり、一緒に花蜜が垂れてきた。

（うわあ、先が当たっているだけなのに、熱くなっているのがわかるよっ）
興奮でどんどん昂たかぶつてきて、肉竿がビクビクツツと脈打っている。ぷっくり膨れ上がった先端を、膣の入口から中へ、ズブズブツと押しこんでいく。

「はあうううっ、ゆっ、裕人のおつきなモノがあ……挿入はいってきたあっ！」

肉棒が侵入してきた刹那せつな。真夕は瞳を見開き、ひきつけを起こしたかのように震えだす。彼女は、挿入と同時に三度目の絶頂を迎えてしまったのだ。

(これが女の子の……真夕姉の胎内なんだ。僕のオチンチンを包んでくれているなんて、すごく嬉しいよっ)

膣肉に覆われたことに感動した裕人は、声を抑えながら腰を動かし始めると、真夕がすぐに喘ぎだす。

「あうう、裕人のオチンチンがとつても気持ちよくて、他のこととかどうでもよくなつちやうっ」

その思いは彼も同じで、ここが校舎裏だということを忘れてしまひそうなくらいに、膣内が気持ちいい。初めての悦楽を得て、脳内まで蕩けてしまひそうだった。本能的にも、腰を動かさずにいられない。

彼女も共に腰を前後に動かし、快楽を貪ってくる。

「凄いや。裕人ったら、こんなに逞たくましいものを持つてたなんて。ねえ、キスしてえ」
うんと頷くと、彼の唇と薄紅色の唇が重なる。すぐに真夕の舌が、唇を割り入って、舌を絡ませてきた。二人の口の周囲は、互いの唾液でべちよべちよになって、垂れていく。

「んふっ、んぶっ、はぶう、ひやうん……ゆうとお、おっぱいも揉み回してえっ」

いわれた通り、胸へと両手を伸ばして覆うが、手から零れ落ちるのではないかと思うほど、指の狭間から乳房がはみでていた。指との間に勃起はつきしきつた乳頭を強めに挟みつつ、押し回し始める。

「はううんっ！ 乳首、挟んじやだめええっ」

ピンクの先端からピュルツと再び飛沫が噴き、乳液が手につく。乳肉を大きく揉み回せば、ミルクが垂れるだけでなく、肉棒そのものを締めつけにかかる。乳房と膣肉が直結しているかのようで、彼女は全身が敏感になっているようだった。

「おっぱいもだめえっ、アソコがキュンキュンきちゃううっ！」

肉棒を締めつける、彼女の反応が面白く感じた裕人は、具だくさんの果肉を持ち上げ、その先端を蛇のようにまると飲みこむ。そして、チュウチュウと吸い込んでいけば、先端から勢いよく液体が零れていく。その汁はコクと甘みがあり、喉を潤していった。

「んんっ……ふはあっ。真夕姉のミルク、すっごく濃くておいしいよっ」

「くひいんっ、おっ、おっぱいいいっ、飲んじやあ、だめええっ！」

それは感じたことのない美味だった。裕人にとつて、母乳を飲むこと自体、憧れのシチュエーションだったが、まさかお隣さんの、一つ上の姉のような存在の、おっぱいを吸ることになるとは、夢にも思わなかった。

真夕の乳首から乳液を放出すると、大声で喘ぐとともに、肉褻が肉棒へ絡みつき、締めつけ感が増す。

「まっ、真夕姉、声が大きいよっ」

「だっ、だつてえ、おっぱい吸われると、気持ちよくなっちゃうんだもん」

念願が叶ったといつても、場所が場所だけに、自由にできるといふものでもない。快楽を訴え続ける彼女の口に、もう片方の乳房を含ませ、黙らせる。すると、彼女自身も乳房を吸い始め、裕人も再び乳房へとかぶりつく。

母性のなせるものか、男の本性のものなのか。ただ母乳がおいしいというだけでなく、ひたすらに乳房を吸い続ける。乳汁の味とコクが癖になって、この行為を止めたくないし、やめたくない。

裕人にとって初めてだらけだったが、本能の思うがままに、肉槍を突き立てていけば、真夕の膣肉はそれに応えるかのように、何遍となく肉槍を強く抱擁する。二人とも汗を滴らせ、結合部から混ざり合った汁が、グチュグチュと恥ずかしい音をたてて垂れていく。しかし、その行為にも限界があった。ここが外だということもあるのか、これまでにない膣内の締めつけで、肉棒そのものが、ブルブルと震えだす。

(ううっ、もう駄目だっ。このままじゃあ、でてしまうっ)

「ゆっ、ゆうとおっ。もっ、もうイキそうなのねっ。こっ、このまま膣内なにいつ、ふひい
いんっ！」

唇の周りには、乳白色の汁が混じった唾液を零し、淫らな笑みを浮かべる真夕。彼女は自ら、これまでよりも、激しく腰を振りたくる。

彼も腰のスピードを上げながら、水音をたてて、肉槍で突き刺していく。そして槍の硬

度が増し、さらに膨れ上がった。しかし。

射精寸前、ふと頭の中に、何故か美夕の顔が浮かんだ。このまま膣内出しはまずいと思
い、肉棒を抜きだした直後。

ドビユウツ、ドビユウウツ！ ドビユウ、ブビユウツ、ブビユウツ！

「んふううつ、んあつううつ、イクううつ、イッチャううつ！」

真夕は頬張っていた乳肉を離し、激しい絶頂感に捕らわれ、膝をガクガクとさせる。乳
頭からは、乳白色の汁を勢いよく噴出。歡喜に震えていた。

引き抜いた肉槍の先から、白濁液が迸^{ほとほと}っていく。その先は彼女の身体や顔、ブルマーに
まで飛び散ってしまう。

「んはああ……んもう、膣内にだしていいっていったのにい。こんなに大量のザーメンを、
かけちゃうなんて……んふう」

濃紺のブルマーにかかった牡の獣液は、より濃く染まっている。瞳をトロンとさせて、
悦楽の余韻に浸っていた彼女は、身体にべつとりと付着した獣液を嫌うこともなく、両手
で塗りたくる。主に乳肉を丹念に揉みながら、ぬちゃぬちゃといやらしい音をたてる。揉
む度にまた、ミルクが飛散していく。

そんな煽情的な姿に、彼は胸を高鳴らせ、ビクンツと肉槍を揺らしてしまふ。

「あつ、裕人のオチンチン、まだまだ元気なのね。もう一回、ヤっちゃやう？」

そのときだった。授業終了を告げるチャイムが、鳴り響く。真夕は授業中だったことを思い出し、慌てて身なりを整え、「続きはまたね」と囁いて、自分の教室に戻っていった。裕人も短パンを穿き直し、股間を押さえながら、逃げるように校舎へ駆けていく。

裕人は帰宅してから、シャツとスウェットパンツに着替えたのち、濱谷家で夕食を摂ったあと、自室に戻る。そして今日あった、真夕との出来事を振り返っていた。

授業中だったとはいえ、姉のような存在の真夕とセックスしてしまったこと。そのことで、終始頭がいっぱいだった。実際あのあとの授業以降ボーっとして、内容が何にも頭に入っていない。そんな一日。

想像以上の体験ができたことは嬉しかった。だが、よくよく冷静になって過去を振り返れば、あの紅茶は、一番気になる美夕だけに、飲ませればよかったのではないか。罪悪感が彼を襲った。

そのまま夜になるとすっかり冷えてきてしまい、とりあえず風呂に入ろうと準備をするが、どうやら故障してしまっているらしい。

仕方なく再度濱谷家へお邪魔し、風呂を貸してくれないかと居間に入る。そこに白のTシャツと青の短パンの格好の美夕が、ソファーにくつろいで、テレビを観ていた。

「んー、お風呂？ 入っていいよ。私はこのドラマ観たあとに入るから」

「それじゃあ早速、第二ラウンドいこうかつ！」

「真夕姉っ、ダメっていつてるでしようっ」

張りきって次女が腕を上げるが、美夕は瞬時にベッドにいる彼へ抱きついて、唇を尖らせる。

「んー、それじゃあ、こうしましょう。裕ちゃんと美夕ちゃんが、もう一度シテるところを見せてくれないかしら？ 私達が見届けてあげるから」

垂れ目で優しく微笑む長女の提案に、「ええ〜」と次女の不満の声が聞こえた。

裕人と美夕は顔を見合わせ、呻きながら顔を赤らめて、俯いてしまう。

「じゃ、じゃあ、始めようか」

彼は姉妹達の視線を気にしつつ、自ら美夕の唇を求めていく。

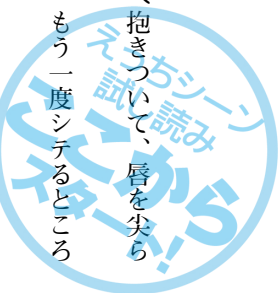
「ゆ、裕人……んふっ、はうんっ、ふうん、はむう……」

二人が観察している前で、裕人達は唇と唇を重ね合わせる。舌と舌を絡ませて、ピチャピチャと音をたてていけば、裕人と美夕の口から、幾筋の唾液が線を描いて漏れていく。

ディープキスを交わしていると蕩けそうになって、美夕と一つになれるような感覚があるが、姉二人の目線が気になってしょうがない。

「そ、それじゃあ、しようか……」

自分でも、デリカシーのない発言だと思った。当然、三女は戸惑っていた。やりずらい



のは確かではあるが。

「じゃあさ、お尻をこっちに向ければ、恥ずかしくないよ」

「あつ、それもそうね」

納得した美夕は、ベッドで両手と両膝を立て、尻を彼のほうへ突きだす。

そこへ姉達が彼を真ん中に挟み、三女の臀部に顔を近づけていく。彼女の秘部からは、彼が放った白濁液と、己の花蜜、そして血流が入り混じり、トロトロと零れ落ちていた。

はつと美夕が気づいたときにはもう遅く、裕人は臀部をがしつと掴む。未だに聳えている肉棒を、穴開きボンテージを着た三女の、恥毛の生えていない秘部へ、近づける。

「ちよつ、ちよつと待ってつ、裕人。これって丸見えじゃないつ」

三女はカアツと顔を赤らめながら、こちらへ振り向くが、もう既に遅かった。

ズブウウウツ！

「ふひいっ!! ああつ、あううつ……ずつ、ずるいわ、裕人つ。こんな体勢になつても、意味なんかないじゃないつ」

彼女のいう通り、体位を変えても、何の意味も成さない。

「うん。だつて、あゆ姉と真夕姉が、傍で見ているからね」

「いやあああつ、見ないでえつ、んぐううつ? だつ、だめえつ、やめてええつ!」

裕人は三女のいうことに構うことなく、再び肉槍を突き進ませていく。身内とはいえ、

間近で視姦されているのだから、ある意味羞恥プレイである。しかし、彼にとっては逆に、興奮材料が増えただけに過ぎない。

細かく腰を上下に刻んでゆけば、肉竿と牝肉の狭間から、グチュグチュと粘液の音が聞こえてきた。

「おっ、お姉ちゃあんっ……お願いだから、みなっ、いいっ、でええっ、うひいいいっ！」
美夕は喘ぎながら、うな垂れているが、初めてのときよりも、汗が多いような気がする。もしかすると、彼女もこの状況で、興奮しているのだろうか。

当の三女は実際、膣内を掻き回される度、腰を無意識に蠢かしていた。汗を滴らせ、火照る身体。喜悦の炎はもう、消えることはない。

「えっ、えぐれるうっ。あっ、アソコがあっ、えぐれちゃううっ、おひいいいっ！」

ひたすらに裕人は、剛直を膣奥へと前進させれば、肉襞を引っ掻き回していく。

美夕からすると、肉竿へ膣肉が絡まってきて、もの欲しそうに竿全体を圧迫し続けている。恥ずかしい姿を見られている、という意識もあるのだろう。濡れ具合も前回より蜜の量が多く、猥褻な水音をたてながら、ポタポタとベッドのシーツにまで、垂れている。

「……ああ、ずつと見てるだけなんて、辛すぎるわ」

ずつと裕人との痴態を、切なそうに眺めていた長女だが、堪えきれなくなったのか、三女の横まで移動して、仰向けに寝転ぶ。

「ねえ、裕ちゃん。指でいいから、私のココを掻き回してえ、おねがぁい」

あゆは垂れている脛を薄く開き、吐息を漏らしながら、脚を上げて、尻を突きだす。メイド用エプロンは捲れ、微量の恥毛しか生えていない、恥丘の下の秘肉からは、トロトロと恥ずかしい蜜が零れていた。

「ずっ、ずるい、あゆ姉っ。……ゆうとお、私にもお、してえっ！」

息が荒かった真夕も、長女とは逆サイドのほうへ移動し、同じようにミニスカートごと、脚を持ち上げる。次女の恥毛は生い茂っていたが、長女と同様に、秘肉も濡れそぼっていた。三姉妹が尻を向けている淫らな景色に、裕人はゴクツと唾を飲む。なんともいやらしい景色に感激し、あまりの嬉しさに歯を噛み締める。

早速彼は両手を伸ばし、指二本を揃えて、媚肉の中へと侵入させていけば。

「はううんっ、裕ちゃんの指、熱いわ」

「んくうっ、きたあ、裕人の指い……早くぐちゃぐちゃにしてえっ！」

指を挿入しただけで、姉二人の膣肉からグチュリと鳴り、さらにトロトロと愛液が吹きだしていく。

彼女達の望み通り、縦横無尽に攪拌していくと、潤んだ膣肉がうねうねと絡み、締めつけにかかり、腰も使いだす。もしかすると、剛直と勘違いしているのかもしれない。だが膣圧に負けじと、加速させて擦っていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>